

Gregory Castle: *Modernism and the Celtic Revival*

Cambridge: Cambridge UP, 2001. viii + 312pp.

荒木映子

モダニズムと人類学との関連が気になっている。T. S. Eliotの『荒地』がJessie L. WestonやJames Frazerの影響を受けていることはよく知られているし、エリオットの評論は何気なく人類学者や未開民族に言及することがしばしばある。たとえば、ミュージック・ホールの女王と呼ばれたMarie Lloydを論じた小論では、いささか唐突にケンブリッジ人類学派の設立者W. H. R. Riversと彼が調査したメラネシア群島の住民が登場する。劇詩を論じても（‘A Dialogue on Dramatic Poetry’）、Jane HarrisonやF. M. Cornfordといった古典学者と共に、トーダ族とかヴェツダ族とかの宗教的な奇習が並記される。Eliotの場合は、大学院の頃から人類学を勉強し、後には人類学の新刊を次々と読んで雑誌に書評を発表し、彼の詩論にも原始的儀式としての詩の機能が反映しているほどであるから、人類学とのつながりが深かったことは確実である（これについては、「越境するモダニズム—「マリー・ロイド」再考」『人文研究』第57巻、2006年3月刊行に書いた）。

モダニズムとプリミティヴィズムあるいは人類学とのつながりについて論じた研究書を、手元にあるものから年代順に列挙してみると、①Robert Crawford, *The Savage and the City in the Work of T. S. Eliot* (1987), ②Marianna Torgovnick, *Gone Primitive: Savage Intellectuals, Modern Lives* (1990), ③Marc Manganaro (ed.), *Modernist Anthology: From Field Work to Text* (1990), ④Marc Manganaro, *Myth, Rhetoric, and the Voice of Authority: A Critique of Frazer, Eliot, Frye, and Campbell* (1992), ⑤Michael North, *The Dialect of Modernism: Race, Language, and Twentieth-Century*

Literature' (1994) がある。①は、Eliotの作品におけるプリミティブなものとは都市への関心を人類学の影響からさぐったもの。②は、モダニズムの美術、小説やポピュラー・カルチャーにプリミティブなものをたどり、プリミティブなものとは要するに、西洋が他者を作り上げる言説であるとしている。③は、題名の通り、人類学がモダニズムの文学批評と豊かに交流することによって、フィールド・ワークに基づいた科学から、解釈されるべき「テキスト」に変わってきたことを示す論文集。④は、複数の文化を比較研究し、未開から文明へという進化論の仮説を再構築しようとする Frazer の古典の人類学が文学（批評）や神話学に与えた影響をたどっている。Frazer は、1920年代以降の Malinowski に代表される機能主義的社会人類学がしたように、現存する未開社会の参与観察 (participant observation) を行わず、第三者の収集した資料に依拠する 'armchair theorist' と呼ばれる。実際に「そこに」いたという権威 (authority) を持たない代わりに、「どこにでも」いたという強みを持つ。つまり、社会人類学（人類学の中でも人類の身体形質面ではなく文化面にかかわる研究は、ドイツ、オーストリアでは「民族学」、イギリスでは「社会人類学」、アメリカでは「文化人類学」と呼ばれるが、それらは名称だけでなく内容にもずれがあるらしい）は、現地調査をした者の単一の視点を使い、その他の声を沈黙させてしまうが、Frazer は収集した多様なテキストを対話させるポリフォニックな魅力を持ち、それがモダニスト達を引きつけたことを論じている。*The Waste Land* はそれが反映されたわかりやすい例であるとしている。⑤は、白人モダニストはプリミティブなものにあこがれ、黒人の声で語る戦略 ('dey' 'dem' 'Hoo ha ha'...) を用いて、標準英語（文学）から外れた方言（文学）を生み出そうと試みたが、ハーレム・ルネッサンスの黒人詩人達はその方言からも逃れようとしたことを示して、大西洋をまたぐモダニズムの地勢図を描こうとしている。

これらの本の少し後に出版された、⑥ Michael North, *Reading 1922: A Return to the Scene of the Modern* (1999) と、⑦ Marc Manganaro, *Culture 1922: The Emergence of a Concept* (2002) は、共に、1922年を文学と人類学両方のモダニズムにとって重要な年であると位置づけている。*The Waste Land* と *Ulysses* の出版、*Criterion* の創刊、Malinowski の *Argonauts of the Western Pacific*、Radcliffe-Brown の *The Andaman*

*Islanders*の出版がすべてこの年に集中しているからである。⑥のNorthはさらに、Wittgensteinの*Tractatus Logico-Philosophicus*の執筆と、I. A. Richards, C. K. Ogden等の*Foundations of Aesthetics*の出版を、1922年の哲学と文学批評における貢献として挙げ、ハーレム・ルネッサンスを代表する詩集の出版をもつけ加えて、学問領域も地域も横断するモダニズム像を提出している。⑦のManganaroは、20世紀前半の「文化」の概念の形成や変遷にいかん人類学と文学（批評）の双方がかかわっていたかを論じている。たとえば、「世の中で考えられ言われたものの中で最良のもの」という1869年のMatthew Arnoldのエリート主義的な「文化」の定義は、人間の制度や習慣もろもろの「複雑な全体」を「文化」としてとらえる1871年のEdward Tylorの人類学的定義（これはエリオットの「文化」概念に継承される）とは激しく対立するもののように思えるが、Arnoldの考え方を子細に見ていくと、Tylorの集合体的な「文化」の定義に近いところがあることを指摘する。「複雑な全体」としての「文化」概念に大きな作用を与えた作品（たとえば、*The Waste Land*, *Ulysses*, *Argonauts of the Western Pacific*）を中心にすえて、モダニズム期の文学と人類学の相互浸透を浮かび上げさせている。

このような一連の潮流には、Edward W. SaidやRobert J. C. YoungやHomi K. Bahbaのようなポストコロニアリズムの理論が寄与したことはいうまでもない。

さて、ここでGregory Castle, *Modernism and the Celtic Revival* (2001) を、出版年が少し古いにもかかわらず、書評に取り上げたいと思ったのは、Yeats, Synge, Joyceのようなケルト復興運動を担った作家達（Revivalists）に与えた人類学の影響を論じている点で、他に類を見なかったからである（Manganaro, *Culture 1922*がJoyceを論じているのを除いて）。Yeatsがアイルランド民間伝承を収集・編纂したことも、Syngeがアラン島を旅したことも、Joyceがダブリンの一日を描いたことも、アイルランドに固有の文化を参与観察によって人類学的に表象しようという試みであったと見なせるというのが著者Castleの主張である。しかし、帝国主義や植民地主義を免れえない人類学を用いて、アイルランド土着の文化をとらえようとするには、おのずとアイルランドに独自の微妙な問

題がつきまとうと彼は言う。イギリスや大陸のモダニストであれば、非西洋的な感性や観点を西洋的な枠組みにおさめてすませられたとしても（「プリミティヴィズム」もその産物である）、アイルランドのモダニストは帝国主義の利益を助長しかねないような人類学と共謀する可能性に抗わねばならなかった。特にアングロ・アイリッシュの Revivalists 達は支配階級であると共にナショナリストであるという曖昧な社会的立場にあり、そういう根無し草的な主体位置のまま、アイルランドの民俗文化を保存し表象することになった。それは、「彼ら自身の人類学的フィクション」の創造であったと言える。

このように、第1章で論じられるのは、アイルランドのモダニズムと人類学との関係の特殊性である。これに関連して、ではどのような人類学との影響関係があるかという点、Eliotのような直接性は指摘されていない。YeatsやSyngeの場合、Eliotのように専門的な人類学の知識があったわけではない。彼らが、アイルランド民俗文化に目覚めたのは19世紀の末という早い時期で、この頃にはA. C. Haddonを中心に、英国学術協会が「イギリス諸島民俗誌学的調査」をアイルランド西部地域で行い、アイルランド人の人体測定をする実験所をダブリンに置いていたという。この調査は、廃れつつある古いアイルランドの風習を保存し、識別しにくくなってきたケルト人種の身体的特徴を記録するという切迫した必要性から企てられた救済活動的なものであったようである。とすれば、アングロ・アイリッシュの彼らがアイルランドの民間伝承を英語に翻訳して「ほんものの」アイルランド文化を保存しようとした時期が、外部の「文明」人がアイルランド西部という「未開」地に人類学的注意を向けた時期と重なったことは、単なる偶然の一致を越えたものがあるのではないか。*Celtic Twilight* (1893) や *The Aran Islands* (1907) は、さしづめ当時の人類学的探究の一部と見なされるのではないかというのが、Castleの論点である。Joyceの場合は、カトリックであること、ナショナリズムやケルト復興にも背を向けたこと、活躍した年代が遅いこと、人類学の本をよく読んでいたらしいこと等々において、先の二人と同列には扱えないとしている。しかし、これら三人の著作を続く章で詳しく分析した上で、結論として述べているのは、三人が帝国主義的な人類学にかかわらざるをえなかった点で共通しているということである。本来、反帝

国主義的であったはずのケルト復興運動が、こういう皮肉な側面を持つとの指摘は、それだけアイルランド独特の複雑さを物語っている。

あとは駆け足で各章の主張を紹介する。第2章では、Yeatsのアイルランドの民間伝承の編纂が、プリミティヴなものに寄せる人類学者の興味からではなく、ナショナルリストとしての自負から来ていることがまず指摘される。また、Matthew ArnoldやErnest Renanのようなステレオタイプ的なケルト観に抵抗しつつ、アングロ・アイリッシュとしての知的伝統を築きあげようとするが、後年優性学の影響を受けてこの志も頓挫するところまでが語られている。第3、4章ではSyngeが扱われる。第3章の*The Aran Islands*の分析では、フィールド・ワークに基づく人類学的考察の面を強く持つとは言え、自伝的なりアリズムを示す文学性が混ざり合うことによって、この作品が不安定さと狼狽を生み出すものであると論じている。従って、この本の読者は、「本当のアラン島」ではなく、「アラン島のSynge」を見いだすだけであって、文化を表象するという行為の可能性自体にSyngeは疑問をつきつけたことになる結論している。第4章で扱われる*The Playboy in the Western World*は、伝統的な文化を人類学的モダニズムの手法で表象するという複雑な問題に取り組んだ作品であることが論じられる。第5章では、Joyceの初期の作品を取り上げて、他者である「ほんものの」アイルランド人と比べた時に自分自身の「偽物性」(inauthenticity)に直面せざるをえない知識人を描き、YeatsやSyngeとは違った方法でアイルランドを創造しようとしたと論じる。第6章は*Ulysses*の分析を通して、JoyceがYeatsやSyngeの後を受けて、「修正的な」人類学的モダニズムの路線を敷いたことが論じられる。

第2章以下の作品の分析自体は精密で面白いのだが、それに対する抽象的な結論がどうもピンとこなくて各章をまとめるのが困難であった。本を読まずに、この書評だけ読む人にとってはなおさらわかりにくいと思う。どうやら、何度も引用されるTerry Eagletonの言葉、「伝統とモダニティ、表象と現実との間の緊張」に、これらの作家達が人類学の方法を借りてどのように対処したかという議論に終始しているようだ。疑問が残るのは、人類学とアイルランド・モダニズムとの関係は、単に時代を同じくして起こった文化現象にすぎないのかと

いう点である。「人類学的モダニズム」というのは比喩ではないはずである。具体的にどのような人類学の影響をアイルランド・モダニストが受けているのかについて、第2章以下で検証してほしかった。知りたいのはまさしくその点なのであるから。人類学の新しい展開を通じて、ケルト復興がアイルランド固有の懐古的でナショナリスティックな運動に限定されずに、より広いモダニズムの文脈につながっていくという視点には、大いに賛同したいのだけれど。

結論では、「人類学的モダニズム」への北アイルランドからの反応として、Seamus HeaneyやDerek Mahonを挙げているのが印象に残った。北もまた西におとらず記憶と歴史の宝庫であり、「ほんものの」アイルランドを復活させる人類学的ないしは考古学的な想像力を持った詩人を生んだからである。

〈追記〉

この書評を書いてから、Castleと同様に、人類学からの影響を通して、アイルランド文芸復興をモダニズムの先駆として位置づけようとする本を読んだ。Sinéad Garrigan Matter, *Primitivism, Science, and the Irish Revival* (Oxford: Oxford UP, 2004) は、アイルランド文芸復興が、モダニズムのプリミティヴィズムとヴィクトリア朝のプリミティヴィズムとの間のミッシング・リンクになっていて、ほとんどこの研究がなされていないことを指摘し、Revivalistsがどのように比較神話学や人類学を用い（時には誤用して）、プリミティヴィズムを生み出したかをより実証的に追究している。